

闇に輝く「世の光」 - クリスマスに思う

小 川 晃 司

クリスマスには、キリスト教主義学校や教会では必ず、燭火礼拝（キャンドルライトサービス）が行われる。厳かな雰囲気の中で、クリスマスの聖書朗読と讃美歌を中心に主イエスの降誕物語が展開される。そして、真っ暗な礼拝堂の中、一人ひとりが手にしているろうそくに次々と明かりが灯されていく。時には全く見知らぬ隣の人から火を分けてもらい、次の人にそれを分けていく。礼拝堂全体にろうそくの明るさと暖かさが徐々に広がっていく様子は幻想的で壮観であると同時に感動的だ。揺らめく炎にいろんな思いが重なる。

最近では、各地のライトアップがクリスマスの風物詩としても定着しつつある。神戸・ルミナリエ、大阪・光のルネサンス、京都・嵐山の花灯路、東京タワーの七色ライトアップ…。煌びやかな光の芸術は美しく、心を和ませてくれる。しかし、光は輝いて様々なものを明るく照らすとともに闇の存在をもクロウズアップさせる。皮肉なことに、闇が深ければ深いほど光は輝きを増していく。

真っ暗な闇。不安と恐れに支配され、先が見えない混沌とした世界。我々の住む社会、人生は闇に満ちている。子供への虐待、通り魔事件…。世界に目を向ければ、絶えずどこかで民族紛争、テロが繰り返されている。理不尽な敵意と暴力には目を覆いたくなる。だが、闇は私たちの心の中にもある。他人への妬みや憎しみ、止むことのない誹謗中傷、感謝することを忘れた飽くなき欲望、人生に対する虚無感…。それは、今も昔も変わっていないようだ。

クリスマスは、救い主イエスの降誕を喜び祝う日である。暗く不安に満ちた世界に光と希望を与えるため、人々の心とからだの病を癒し、迫害・差別され孤独に疲れた人々に慰めと励ましを与え続け、最後は我々人間が持っている罪（イエスを十字架に追いやってしまうほどの罪）の身代わりとなって十字架にかかってくださったイエス・キリストをおぼえる時である。ヨハネ福音書では「すべての人を照らすまことの光」がこの世に来たと紹介している。

そのイエスが私たちに対して「あなた方は世の光である」と言われた。私たちにはそれぞれに、何かの才能が神からプレゼントされている。イエスの生涯に思いを馳せ、その光を受けて、与えられた賜物を自分自身のためだけにではなく、周りの人のために用いていきたいものだ。自らは光を発することの出来ない月や惑星でも太陽の光を反射して暗い夜道を照らすことが出来る。一つひとつのろうそくの炎は小さくても、隣の人に分けていくことで明るさと暖かさは徐々に広がっていく。ろうそくの炎の向こうに平和への足がかりが見えた。メリー・クリスマス！

（職員・経営戦略研究科）